

「祈りの残響」

—初稿—

2025/10/27

雨森 れに

〈人物表〉

吉永よしみず 遼輔りょうすけ

(36) 副業で猟師をしている

田辺たなべ 善治よしはる

(79) 先輩猟師

田辺みほ 美穂

(76) 義治の妻。アルツハイマー型認知症

1. 山（昼）

田舎にある小さめの山。根雪がちらほら残っている。
吉水遼輔（36）が猿用の箱罠を確認する。

餌を食べた様子がない。

休憩している田辺義治（59）に向かって、

吉水 「今日は何も食べてないですね」

田辺 「だろうよ。猿つてのは頭がいいからな。毎年同じ手は使えないんだわ」

吉水 「なら、どうします？ 箱の場所変えますか」

田辺、吉水に向かって猟銃を構えるマネをする。

田辺 「バーン」

にやりと笑い、

田辺 「撃つしかねえよ。お前、もう何年だ」

吉水 「5年、ですかね」

田辺 「猿は去年からだよな。狩猟は猿撃って一人前。わかってんだろ？」

吉水、頷く。

2. 公民館・外観（夕）

こぢんまりとした公民館。駐車場は満車で、自転車も複数停まってる。

3. 公民館・室内（夕）

広めの和室。住民らが集まっている。

住民1が畳を叩く。

住民1 「猟友会は何してんだ」

住民2 「畑ばかりじゃないよ。タラの芽やふきのとうだってやられて、商売あがったりだよ」

住民らは吉水と田辺を睨む。

吉水、ぺこぺこ頭を下げつつ、

吉水 「善処してます。でも、なかなか引かからなくて」

住民1 「銃で殺しちゃえ」

住民3 「そうだよ。ほら、私なんてこれ」

住民3が腕をあげる。

肘から手首にかけて包帯が巻かれている。

住民3 「噛みつかれてこのザマだよ！」

住民らがヒートアップしていく。

住民2 「なんで人間が我慢しなきゃいけないんだか」

住民1 「毎年毎年……もう我慢できねえ。捕獲はなしだ。殺せ！」

吉水、横にいる田辺を見る。

田辺は腕を組んで考え事をしている。

吉水、頭を掻く。

吉水 「次の土日は銃で向かいますので」

住民1 「当たり前だろ！」

田辺 「銃だつてタダじゃねえんだぞ」

全員の視線が田辺に集まる。

田辺 「銃のがリスクあるのによ。それを強制すんなら、もちろん報酬も弾むんだろうな」

吉水、驚いたように目を見開く。

住民らはそれぞれ目配せし合う。

田辺 「ん？ どうなんだ」

4. 吉水の車・車内（夜）

軽トラ。吉水が運転している。

吉水 「もともと銃使うつて決まっちゃったよね？」

田辺 「どうせ使うならより高く、てな」

吉水、笑って、

吉水 「ちゃっかりしてる」

田辺 「お前が一人前になるお祝いだって」

吉水、田辺をちらりと見る。

吉水 「俺、やっぱり——」

田辺 「今まで教えてやった通りにすりゃ、大丈夫だよ」

田辺が鼻歌を歌いはじめる。

吉水の手に入力が入る。

5. 山（朝）

路肩にトラックが停まっている。

吉水と田辺が降りる。

ふたりは猟銃を背負って、山の中へ。

田辺 「かーちゃんの世話で一週間があつという間だわ。昨日来たみたいを感じるよ」

吉水 「俺も。仕事が忙しくて」

田辺 「営業だっけ」

吉水 「不動産の。心がすり減りますよ。人のためになりたくて選んだ仕事なんですけどね」

田辺 「家とか土地が？ 争いしかねえだろ」

吉水 「なんも知らない若造だったんですよ」

吉水、足を止める。

木の皮が帯状に剥がれている。

田辺も気づき、周囲を確認する。

田辺、小声で、

田辺 「クソがあつた。まだ新しい」

吉水 「引きつけ役、ですかね」

田辺 「かもしれん」

田辺、注意深く歩き出す。

吉水も後を追う。

かじりかけの木の実、歯形のついた草木が次々と見
つかる。

田辺の歩みは速度をあげる。

吉水の呼吸が早くなる。

田辺、立ち止まる。

吉水にアイコンタクトを送る。

ふたりは猟銃を手に持つ。

木の枝がばさばさと揺れる。キーキーという猿の警
戒音。

吉水、双眼鏡を覗く。

枝の間に若い猿がいる。

吉水は田辺に双眼鏡を渡す。

田辺 「引きつけ役にしては若いな。迷子か、追い出されたか」

吉水 「だから食べ物に困って」

田辺 「そんなところだろうな。つまり、アイツをやればいい」

田辺、吉水に背中を叩く。

吉水は猟銃を握りしめる。
ゆっくりと標準を合わせる。
なかなか引き金を引けない。
猿が動き出す。

田辺 「おい」

吉水、発砲。
猿が地面に落ちる。

まだ息があり、逃げようともがいている。

吉水が近づく。

猟銃を向ける。

猿は吉水に対し、拝むような仕草をする。

吉水、後退る。

田辺、吉水の背中を支える。

吉水は田辺に助けを求めるような視線を送る。

しかし、田辺は首を横に振る。

吉水、目を強く閉じる。

猟銃を構えなおし、拝む猿に向ける。

息を止め、スコープを覗く。

発砲音。

吉水の肩から力が抜ける。

田辺 「よくやった」

吉水、猿を見て頭を抱える。

田辺 「みんな最初はそうなる。人に近いからな。でも、こいつらを殺すのが『人のためになること』なんだよ」

吉水、崩れ落ちる。

6. 介護施設・廊下（昼）

施設の制服を着た吉水が、田辺美穂（76）の車椅子を押している。

吉水 「今日はご主人が来る日ですね」

美穂 「迎えに来るの？」

吉水 「いえ、また出張に行くんですって。美穂さんの顔を見に来るんですよ」

美穂 「いつまでここにいればいいのかしらねえ」

7. 介護施設・美穂の部屋（昼）

二人部屋。吉水と美穂が部屋に入る。
美穂のベッドに田辺が腰掛けている。

田辺 「おう」

吉水、微笑んで会釈。

8. 介護施設・庭（昼）

穏やかな春の日差し。

吉水と田辺が並んで歩いている。

田辺 「もう猟やんねえのか」

吉水 「こりごりです。人のために始めたはずなんですけどね」

田辺 「お前っていつもそれだな」

吉水 「だから転職もしましたし」

吉水が制服をつまんで見せる。

田辺、鼻で笑う。

田辺 「若いな」

ふたりの間に桜の花びらが落ちる。

頭上に立派な桜がある。

吉永、桜を見上げ、

吉水 「今まで俺は迷子だったんです。迷って迷って、ようやく
天職に出会えました」

田辺、無言で桜を見上げる。

9. 介護施設・美穂の部屋（昼）

吉水と田辺が美穂の部屋に戻る。

美穂、怒ったように、

美穂 「吉水さんの邪魔しちやだめでしょ」

田辺 「してねえよ」

美穂 「吉水さん、ごめんね」

美穂が手を合わせる。

吉水、小さく息を飲む。

すぐに笑顔になり、

吉水 「とんでもないです」